

上野殿母尼御前御返事

弘安四年一二月八日 六〇歳

乃^の米^{まい}一^駄・聖^す人^み一^つ、^筒二十^ひひ^さげ^が、^蓋かつ^かう^ひと^かう^ぶく^ろお^くり^給ひ^候ひ^了ん^ぬ。このと
ころのやうせんぜんに申し^前ふり^前候^古ひぬ。

さては去ぬる文永十一年六月十七日この山に入り候ひて今年十二月八日にいたるま
で、此の山出づる事一步も候はず。たゞし八年が間やせやまいと申し、としと申し、
としどしに身ゆわく、心をぼれ候ひつるほどに、今年は春よりこのやまいをこりて、秋
すぎ冬にいたるまで、日々にをとろへ、夜々にまさり候ひつるが、この十余日はすでに
食もほとをどとゞまりて候上、ゆきはかさなり、かんはせめ候。身のひゆる事石のごと
し、胸のつめたき事氷のごとし。しかるにこのさけはたゞかにさしわかして、かつかう
を、はたとくい切りて、一度のみて候へば、火を胸にたくがごとし、ゆに入るににたり。
あせにあかあらい、しづくに足をすゞく。此の御志ざしはいかながせんとうれしくをも
ひ候ところに、両眼よりひとつのなんだをうかべて候。

まことやまことや、去年の九月五日こ五郎殿のかくれにしはいかになりけると、胸う
ちさわぎて、ゆびををりかずへ候へば、すでに二箇年十六月四百余日にすぎ候か。それ
には母なれば御をとづれや候らむ。いかにきかせ給はぬやらむ。ふりし雪も又ふれり。
ちりし花も又さきて候ひき。無常ばかりまたもかへりきこへ候はざりけるか。あらうら
めし、あらうらめし。余所^よにてもよきくわんざ^冠かなよきくわんざ^者かな、玉のやうなる男
かな男かな。いくせを^親やのうれしくをぼすらむとみ候ひしに、満月に雲のかゝれるがは
れずして山へ入り、さかんなる花のあやなく・かぜのちらかせるがごとしと、あさまし
くこそをぼへ候へ。

日蓮は所らうのゆへに人々の御文の御返事も申さず候ひつるが、この事はあまりに
なげかしく候へば、ふでをとりて候ぞ。これもよもひさしくもこのよに候はじ。一定^{いちじょう}
五郎殿にゆきあいぬとをぼへ候。母よりさきにげざん^見し候わば、母のなげき申しつたへ
候はん。事々又々申すべし。恐々謹言。

十二月八日

日 蓮 花 押

上野殿母御前御返事